

耕土耕心

第28号

令和3年
2月5日

編集・発行

静岡県立農林大学校
同窓会

〒438-8577

磐田市富丘678の1

電話

0538-36-0211

コロナ禍での農業振興

同窓会長 大原正和



新年あけましておめでとうございます。

私は岩倉前会長の後任の大原正和と言います。昭和四十六年、当時静岡市北安東にあった農業講習所を卒業した後、農業改良普及員として県職員となり約四十年間を農林事務所や県庁で農業行政の推進に当たりました。退職後は地域活性化活動を経験、その後は農協理事を経て現在は静岡市農協の組合長を務めています。

さて、国全体の農業についてですが農業就業者数や農地面積の大幅な減

少により生産基盤の脆弱化が進んだ結果、カロリーベースの食糧自給率は三十七%に低迷しています。これに対し、国は令和二年三月に策定した「食料・農業・農村基本計画」で食料安全保障の確立と農業・農村の重要性について国民的合意形成が必要だとしています。また、中小・家族経営など多様な人材や経営主体の活躍が農業の持続的な発展につながるとうたっています。

大規模で生産効率の高い経営体を主体としながらも、家族経営という我が国固有の経営体による農業生産の重要性が見直されつつあります。

ここに農協の果たす役割があり、組合員とともに持続的な農業生産と地域貢献を果たしていくつもりです。

しかし、コロナ禍で一部の農産物需要低下、対面方式の見直し、会議等集合機会の縮小など事業推進に多くの課題をもたらしています。このため、組合員、役員が一丸となりコロナ感染症防止策の徹底や新たな農産物販売方法の模索などコロナに合わせた柔軟な対応でこの難局を乗り越えて行きたいと考えています。

同窓会会員の皆様におかれましても、関係者と手を携えてコロナの時代に生き、併せて農林大学校同窓会に対する御支援御協力をお願いします。

一陽来復

農林大学校長 滝田和明



明治三十三年に農事試験場見習生制度として産声を上げた農業者の養成教育は、令和二年に百二十年の節目の年を迎えました。四月には農林大学校の後継となる専門職大学・短大が最初の入学式を挙行、本校最後の養成部が始業した矢先。新型コロナウイルス感染症拡大防止の名の下、学校休校を余儀なくされました。

感染症対策としての休校は、本校の長い歴史の中でも例のない事態だと思います。五月半ばまで一ヶ月余の学生不在中は、教員が圃場を管理し、慣れない遠隔授業を実施。学校再開後はカリキュラムを大幅に見直す（先進経営研修もちよつぱり短縮...）ことで授業時数を確保。職員の負担も大きかったのですが、何よりも卒業研究の中断や詰まった時間割で学生には苦勞を掛けました。

夏の校内即売会であるマルシェや出張販売を断念、農大祭は中止、東京での流通研修は県内に変更と学生の楽しみも奪ってしまいました。

異例続きの学校運営ですが、対面授業には拘り、農大生も専門職大生も区別なくキャンパスライフを謳歌できているのが何より。先進経営研修先からは「さすが農大生」というお言葉をたくさんいただいたこともでき、先輩方に負けず劣らずの最後の農大生を送り出すことができそうです。厳しい経済情勢で求人数が激減し、農林業関連企業への就職が多く、就農者が例年になく少なめなのはいささか残念ですが。

間もなく新校舎が完成、その後新寮も整備予定で、富丘の地には新しい景観が出現します。これを機に、在学当時を思い出しながら再訪されるのも良ろしいのでは。

この地が本県農林業の根幹を支える地であり続けるよう、これまでの同窓生の皆様の御協力に感謝すると共に、一層の御理解と御支援をお願いいたします。

《特集》
新大学が開学して

農林環境専門職大学学長 鈴木滋彦



時下、ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。全国初の農林業系の専門職大学として、令和二年四月に静岡県立農林環境専門職大学・同短期大学部が開学しました。同窓会会員の皆様、県立農事試験場に見習生制度が開設されてから今日まで、一、二〇年の長きにわたり本学の歴史を支えて下さった皆様、また開学に御尽力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

祝福すべき開学の年をコロナ禍の下で迎え、入学式は校内に分散して音と映像での開催となりました。予定していた開学記念式典も年を跨いで延期となり、開学後も、外出自粛のため新大学宣伝の御挨拶に伺うことも叶わない状況が続きました。一方で、学生の教育に関しては、四月こそは休学しましたが、五月はオンライン授業を行い、六月からは「対面授業」を開始しました。多くの大学がキャンパスを閉じるなか、実習・演習を重んじる本学は、感染対策に留意しつつ初年度の教育を

進めてまいりました。耕土耕心の校訓とその精神を、すなわち歴史と伝統を引き継いで、新たな高みに向かって出発したところです。

専門職大学の特徴の一つに「臨地実務実習」があります。これは長期のインターンシップに相当するもので、企業や事業所で実務を通して行う実習です。学内での実習の基礎の上に、生産技術を身につけること、マネジメントを学ぶこと、経営戦略を学ぶことを骨組みとしています。既存の、先進経営研修を基礎としつつその発展形としたいと考えています。専門職大学が全国に十一校あり、次年度は五校が加わる予定ですが、まだその知名度は低く、また評価も定まっていません。臨地実務実習での教育成果が専門職大学の成否を分けるカギになるといつても過言ではない状況です。この実習は、大学の教員だけでは到底動かせるものではなく、多くの経営体の皆様の御協力なくしては進みません。同窓会をはじめ、関係する皆様の御指導、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

《学校の話》
農林環境専門職大学の
施設整備について

専門職大学 総務企画課

令和2年度も残すところ数か月となり、令和3年4月の供用開始を目指し、令和2年1月から行ってきた新校舎の工事、オープン準備共に大詰めとなってきました。

専門職大学への移行に係る施設整

備については、構想段階では、設置認可を受けるために必要な講義室や実験室の整備などの計画に留まっております。しかし、整備方針の策定にあたり、設計段階から静岡文化芸術大学の学生の皆様に御参加いただくことにより、既存施設と新たな施設に一体性が生まれるとともに、デザイン性に富んだ魅力ある計画に様変わりしました。本稿では、「農と林」をテーマとした今回の施設整備の特徴を紹介してまいります。

まず、昨年度は既存の農林大学校校舎（4階建、3,104㎡）について、講義室を教員研究室にするなどの改修工事を行いました。この工事においては、フロアごとに太陽、植物、土などの自然をイメージさせる色彩を用い、施設利用者が感覚的に現在地の階数を認識できるようにしました。また、正面玄関の内装や各部屋のサインに県産木材を用いて温かみのある空間としております。

続いて、現在工事中の新校舎（3階建、3,224㎡）には、情報通信設備を導入した講義室や様々な研究に対応できる実験室のほか、吹抜け構造を採用した開放的な食堂、図書館などを設けます。食堂は、学外の皆様への開放を予定しており、本学で収穫した野菜などを調理して提供することで農林業の魅力を発信してまいります。なお、新校舎にも既存校舎と同様のフロアカラーを採用し、両施設の親和性を持たせております。

また、1階部分には高床式倉庫をイメージしたピロティ空間を設け、外

壁には太陽の光を適度に取り入れられる県産の木製ルーバーを設置します。このほか、既存校舎前のメインロウタリーには、新校舎の木製ルーバーと一体感をもたらす県産CLT木材を使用したキャノピー（庇）を設置することも大きな特徴の一つであります。

このように、ここ数年で大学施設全体が一体的で魅力ある施設に生まれ変わろうとしています。今後も新たな学生寮の整備や、その後取り壊し予定である既存男子寮の跡地整備などを予定しており、職員一同、より一層魅力ある大学を目指してまいりますので、関係する皆様におかれましては、引き続き、温かい御支援をお願いいたします。



『学生生活について』

学生課 主事 久保田基仁

【農林大学校について】

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、4月初めからの臨時休校を経て、5月25日より校内における通常授業を開始いたしました。先進経営研修では、コロナ禍の中で例年と変わらず、日頃より御支援を頂いております農林業法人、関連企業、農家の皆様方に学生を受け入れて頂きました。無事に全員が研修を終えることができましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

今年も専門職大生と共に学生生活を過ごしておりますが、先輩として専門職大生を引っ張っていく農林大生の姿は頼もしい限りです。

今年度が養成部最後の卒業生になります。彼らの飛躍を期待し、残りの学生生活を引き続きサポートしてまいります。

【農林環境専門職大学について】

4月に入学した新入生104名の学生生活も、早くも1年が過ぎようとしております。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、規模縮小で開催した入学式からスタートした学生生活は、その後、大学臨時休校と遠隔授業の実施を経て、6月より通常授業を開始いたしました。



専門職大学へ移行後においても1年次は全寮制を踏襲しており、寮生活を通して農林業現場では欠かせない社会性やコミュニケーション能力を養っております。寮での仲間との共同生活は、学校生活の楽しい思い出と将来に渡る良き友をつくる貴重な時間になると思います。

今年も8つのサークルが新設され、学生自治会の支援のもと活動しております。コロナ禍で様々な制約がありますが、工夫を凝らして活動する学生の姿は、とても立派です。



今後とも学生にとってここ富丘の地で過ごす学生生活が一生の財産になるよう、学生課一同全力でサポートしてまいります。

皆様方に置かれましても、今後とも引き続き、御支援、御協力をお願い申し上げます。

《支部だより》
「卒業、定年退職、移ろい行く」

東部支部長 五十棲 剛
【昭五十五農林短卒】

私は、昭和55年3月に農業短期大学校を卒業、4月から県の職員となり4年間勤めた後、令和2年3月に退職しました。最後の職場は、静岡県農林技術研究所果樹研究センターです。センター長をさせていただきましたので、農林大学校果樹分校長を兼務し、これが最後の職ということになります。

農業短期大学校を卒業するときに農林短期大学校がで、今回退職するときに農林大学校に在職し、また農林環境専門職大学ができたことに、妙な縁を感じています。

当時は、農業短期大学校卒業で、農業改良普及員の受験資格を得ることができたためこれを目当てに入学し、運よく静岡県職員（農業改良普及員）となることができました。

総合農業学科の同級生は50名ほどおり、卒業後の進路に、農家はもちろんJAの職員、技術員も多く、また、先輩や後輩もこうしたところいらっしやったことから、農業改良普及員として働いているうえで多くの面で助けていただき、心強くもありました。

一方、本校の同窓会とは別に、昭和15年の柑橘試験場開場以来、果樹分校等の卒業生で組織されていた、「橘会」について、令和3年3月に農林大学校が農林環境専門職大学に移行し、分校が廃止になることから解散する旨の通知を11月に頂きました。1学年の学生数も少なく、非農家が多い中では残念ですが仕方がありません。

卒業して40年経ちますが、改めて考えてみると農業だけでなく様々なものが変化し対応が求められてきました。農林大学校も農林環境専門職大学として新たな歴史を作っていくっていただきたいと思えます。

時代の流

小笠支部長 平川幸治
【昭五十二農林短卒】

新型コロナウイルスの出現により、いろいろなことが起こり始めましたね。普段では気にしていなかったことも、今は気にしなくてはなりません。

マスク、咳、発熱。それだけで敬遠されてしまう。人の移動もままならず、遠出は勇気が入ります。それでも、生きていくためには最低限の行動はしなくてはなりません。

隣近所の付き合い方も変わってきましたね。人と人との繋がりも新しい感覚になって、戸惑うこともあり。少し前まではごく普通に、近くで遊んでいる子どもにも声を掛けても問題もありませんでしたが、今では通報されずしてしまふようになりました。ご近所さんで挨拶を交わすのもめんどくさがられたり、触れ合うことを嫌がられたりします。

農業も色々変わり始めました。流通も多様性を求められ、販売チャンネルがちゃんとしていないと取り残されていきます。法人化が農政の目玉になったと思えば、国連で家族農業を奨励したりしています。これからどうなっていくのか不透明さを感じつつも歩いていかなくてはならない。今、農業界でもネット流通が増えてもはやされています。農家が独自サイトを運営したり、大手通販サイトを利用したり様々です。

しかし、ネットビジネスを手掛ける人たちの間では、農業分野に手を出しても儲からないというのが定説です。なぜでしょうかね？

ネットビジネスを手掛ける人達は、膨大な利益を生み出しています。リアル店が苦戦し利益確保に苦心している横で、ネットビジネスで成功している方々は、高級車を何台も持ち、有り余る利益の使い道に、リアル店舗の買取までしています。それなのに農業分野

はリスクが大きいようで手を出すのはタブーだそうです。他の事業のように大きな利益が動かないのでしょうか。

でも、このような人達の中にも農業に興味を持つ方もいます。こんな時代だからこそ食料が大事だと考えて、ネット社会の成功を捨てて、農業に真剣に向き合おうとする方もいます。これを農業に従事している方達はどうか感じ、どう捉えるのでしょうか。また、農業を学んでいる若者たちはどう考えるだろう。農業の本質は、実体のある命を育む物だと私は思います。仮想空間の命を育む物ではないでしょう。ネット社会を育んできた人間の命を支えるもの。ネット社会から農業に目を向けた人達は、お金には変えられないものが農業にはあるといえます。農業に携わっているみなさんは、どう思われますか？私は、最近利益重視の経済社会に農業が埋もれていってしまい、本来の重要な部分が削り落とされてしまったように思えて仕方ありません。人が食するものと、お金を求めるための品物との違いとでも言ったら良いのでしょうか？人の命を繋ぎ、その心を維持する食べ物。それを作り出すのが農業だと思われてなりません。農産物には人としての心が伝わっているように思います。農産物も命そのもの。人間の思いは伝わりそこに反映されてゆく。農業を目指す人達には心を大事にしていたいただきたいのです。心あるものはどんな時代になっても受け入れられるものです。流れ消えゆくものと、残る物は自ずと決まって来ます。心を大事に。

《若手会員紹介》 ベルファーム株式会社

青野諒己
【平三千農林大卒】



私の実家は農家ではありませんが、農業という職に惹かれ静岡県立農林大学校に入学しました。昨年、卒業し現在は菊川市にあるベルファーム株式会社に務めています。

現在、働いているベルファーム株式会社は約6.5haの面積で大玉トマトのハウス栽培、小規模ですがアスパラガスのハウス栽培も行っています。私は入社して半年で1棟約50aのハウスを任せてもらえるようになりました。農林大学校ではトマト専攻で1年半ほどトマトの栽培管理、基礎知識を学んでいたのですが栽培面積や管理方法の違い、またオランダから導入した環境制御装置の操作等に苦しめられました。最初の作ではススカビ病がハウスに蔓延してしまい計画収量の3分の2ほどしか収穫できずとても悔しい思いをしました。作の終了後に「なぜこのような結果になってしまったのか」を考えました。原因としてはススカビ発生初期に農薬散布ができていなかったこと、ハウス内湿度が高かった事が考

えられました。この反省を踏まえ次作から病気が確認された際、すぐに防除を行うことやハウス内環境を細目に確認するなど気を付けて栽培を行っています。

この仕事では消費者の方に直接会う機会はありませんが、自分の会社のトマトをスーパーで見かけると少しうれしくなります。入社してから1年半ほど経ちましたが、まだまだ学ばべきことがたくさんあるので初心、向上心を忘れず生産者としてのやりがいを持ち日々、励んでいきたいと思っています。

家族と一緒に

鈴木希巴江
【平三千農林大卒】



私の家では、「森の姫牛」というブランド交雑牛を育成しています。

太田川の伏流水と近隣で収穫された米や稲わらなどを与え、風通しの良い牛舎で育成された「森の姫牛」は、脂が控えめで柔らかく、甘みと旨みがあるのが特徴です。

現在では県内のいくつかのレストラン等で使っていたいただいて、かなり評価していただいています。

その牛を育てる仕事の現場では、父、祖父、姉、私がメインで作業をし、書類の作業は母がメインで行っています。父や祖父はとても仕事が早く、たくさんの仕事を一人で回します。私が高校生のときから、先に農林大学校に入学し勉強し、父や祖父の仕事ぶりを見ていた姉は、「女だから力がなくて作業ができない、ではなく、機械を使うことで、同じように仕事ができるようになっていけばいいよ。」と私にも教えてくれました。

その後私も学校に入り、多くの機械の免許を取り、必要な知識を身に付けて家に就農しました。

はじめはあまり力もなく、機械もうまく動かせなかったのですが、姉が色々なアドバイスをしてくれました。「子牛の体調の見方」や「作業の時に困ったこと」などの細かいことをたくさんメモに残してくれてあり、それを見てたくさん仕事を効率よく行えるようになりました。今では、会議や市場で作業中に父が抜けなくてはならないときも、「希巴江がいるから任せて行けるね」と任せてもらえるくらい仕事ができるようになってきました。まだまだ未熟なところもたくさんありますが、これからも家族と一緒にブランドを盛り上げるため、仕事に真摯に取り組んでいきたいです。

△事務局からのお願い▽

住所変更、訃報等は、各支部長又は支部役員まで連絡をお願いします。